

「質向上」・「質保証」の PDCAサイクル体制の構築

私立大学等改革総合支援事業タイプ1（選定：平成25～29年度）



富山短期大学

取組のポイントや補助効果

- ◆ PDCAサイクルのプラットフォームとなるWebシラバス・システム
- ◆ 改革を進めるための学長の強力なリーダーシップ

富山短期大学は、1963年に富山県民の強い要望を受け富山女子短期大学として開学し、地域に支えられながら地域社会への貢献に努めている。2000年に男女共学化し、現在の校名に名称変更した。教育理念として「高い知性と広い教養、健全にして豊かな個性を備えた人材の育成」を目指し、ディプロマ・ポリシーで設定した五つの力（①専門的知識・技能、②思考力・判断力・表現力、③主体的に学ぶ力、④協働力、⑤人間性）を身に付けることで全人的な人間形成を目標としている。

現在は4学科が設置され、収容定員660名である。

取組に至る背景や問題意識

当短期大学では、文部科学省の答申等を参考にしながら、2012年度に三つの方針を策定し、さまざまな教育改革を取り組み始めた。

当時、学生が紙媒体のシラバスをあまり見ておらず、主体的な学びを促すにあたり問題があったことや、シラバスの中には授業の概要しか記載がなかったため、教員間で授業内容の情報共有が限定的であり、組織的な取り組み体制や教育課程の体系化にも課題があった。加えて、経営資源に制約のある小規模短期大学であるため、効率化についても検討の

必要があった。以上の課題を解決するためには「学修成果」に係るデータの収集や集計等を自動化し、効率的かつ効果的に、教育の質向上・質保証のPDCAサイクルを実施できる体制づくりが必要と考えた。

そこで、学修・授業支援システムとしてシラバスを電子化し、授業と連動させるシステム（Webシラバス・システム）を2012年度に構築し、2013年度より経営情報学科のみで運用を開始した。2014年度からは全学で運用している。システムの構築に当たっては、「私立大学教育研究活性化設備整備事業」の補助金を活用した。

2014年度に、「大学教育再生加速プログラム」に選定された後は、Webシラバス・システムの機能を拡張し、「学修成果の可視化」によるPDCAサイクルのプラットフォームとしている。

アクティブ・ラーニング環境の整備も進めており、「私立大学等教育研究活性化設備整備事業」の補助金も活用しながら、ラーニング・コモンズやグループワーク専用ルーム、プレゼンテーション・スタジオなど学生の振り返りを促す環境づくりに力を入れている。

2014年度に受けた認証評価で、学修成果の可視化の重要性及び改革を持続することの必要性を認識し、2015年度にアクションプラン

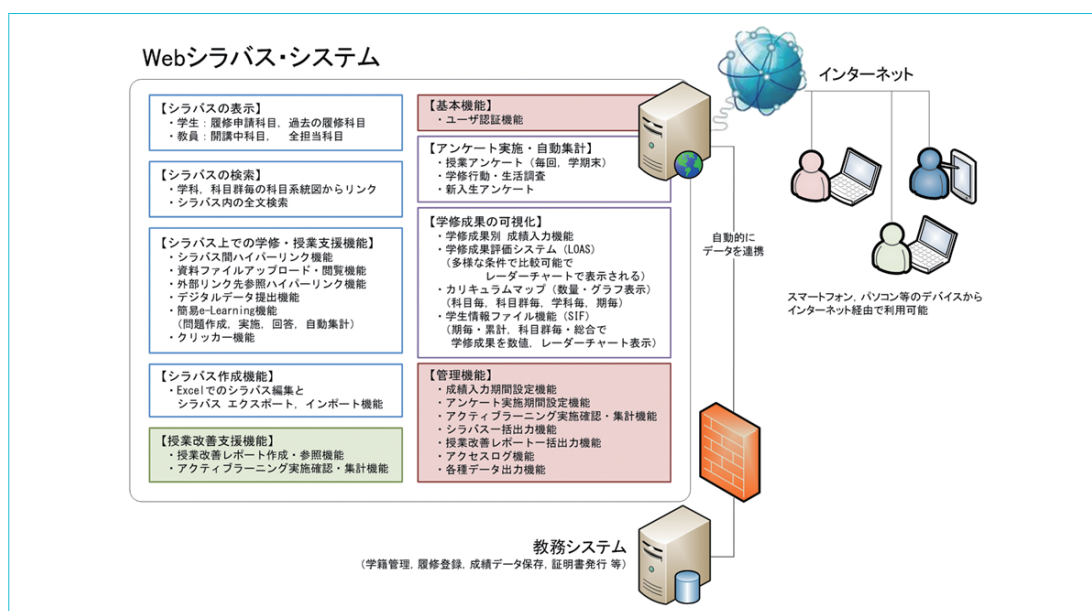


図1 PDCA サイクルを支える Web シラバス・システム

を策定して、不断の教育改革を実施している。現アクションプランは2019年度までを予定している。

取組の目標・目的

学修成果に関する可視化データに基づいて、日々の教育活動の中にPDCAサイクルを組み入れルーティン化することで、持続的な授業改善・学修改善・教育課程の改善を実現し、教育の質向上・質保証を図る。さらに、可視化データをもとに、ステークホルダーをはじめ第三者に「対外的説明責任」を果たすことを目指している。

取組内容

Webシラバス・システムには、科目の学修目標や授業計画、成績評価方法、カリキュラム・ツリーなどが記載されている (図1)。学生アンケートや教員による成績評価入力もWebシラバス・システム上で実施でき、その結果の集計や分析を自動化することで学生や教員へのフィードバックを容易にしている。また、学生はパソコンやスマートフォン

から利用が可能である。

Webシラバス・システム上の授業計画では、授業ごとにその内容や必要な授業外学修時間を記載し、単位の実質化を図った。また、授業ごとの予習・復習の課題の提出機能も備えており、学生はシラバスを見ないと授業に参加できない仕組みになっている。課題提出機能は授業時間内での課題提出やそのフィードバックにも活用できるため、グループワークや反転授業、ピア・アセスメントなど学生の振り返りを促すさまざまなアクティブ・ラーニングが可能となる。

学科科目の学修成果の評価には五つの基準を設定しており、基準別に科目に配点し成績評価を行う。教員が各基準に設定されたルーブリックに基づいて成績評価を行い、学生自身も自己の到達度についてルーブリックを用いて把握できる。五つの基準は、知識・理解 (LO1)、技能 (LO2)、思考力・判断力・表現力 (LO3)、関心・意欲・態度 (LO4)、人間性・社会性 (LO5) であり、ディプロマ・ポリシーにおいて身に付けることを目指す五つの力に基づいて設定している (図2)。

学生アンケートは複数の種類を実施しており、その一つに毎回の授業アンケートがある。

授業に対する学生の理解度や興味、関心等をリアルタイムで把握でき、次回の授業改善が可能となる。さらに、アンケート結果を学生にフィードバックすることで、他の学生の考え方を知ることができ振り返りを促す効果もある。

また、毎回の授業アンケートとは別に期末の授業アンケートも実施している。アンケートでは、五つの基準に対して達成度の自己評価等を調査している。2015年度からは、期末の授業アンケートの集計結果をもとに、全専任教員が毎期末に「授業改善レポート」を作成しており、次年度の授業改善につなげている。

2016年度からは各学科の教員一名が「授業改善レポート」をもとに授業改善事例の発表会をFD・SD研修会として実施した。さらに、発表内容を冊子にまとめ、授業改善の内容等を教職員間で共有している。

Webシラバス・システム上には、学生情報ファイル・システム（SIF）というものがあり、五つの基準による学修成果の成績評価と自己評価をレーダーチャートや表として可視化しているため、学生自身に分かりやすく伝えることができる。学科の平均値も確認でき

るため、振り返りを促す効果につながっている。GPAや取得単位数の確認も可能である。

新入生アンケートや学修行動・生活調査も実施している。五つの基準をもとに「身に付けるべき17の資質と能力」を定め入学以降の成長度の自己評価を調査している。その集計データの成長度と学修成果の到達度（期末の授業アンケート結果）を用いてディプロマ・ポリシーの検証を行っている。

カリキュラム・ポリシーや教育課程の検証を行うため、五つの基準での配点の結果や期末授業アンケートの自己評価結果を集計、分析したものから、「教育課程改善レポート」を作成した。教育課程を可視化することができ、改善のための深い議論が可能となった。

シラバスの記載内容の点検は、2017年度より実施しており、学科長や教務委員が担当している。各学科のディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーに基づいて、シラバスが適正に作成されているか点検する。基本的には、学修目標や到達目標、評価方法、授業計画、ルーブリックの適切性・妥当性を点検し、必要な場合は、教員に改善を要請している。



図2 富山短期大学の「学修成果」と可視化手段・方法

実施体制

全学的な教育改革を強力に推進するため、2015年度に学長が委員長である自己点検・評価委員会のもとに、教育改革推進部会（主査：教務部長）、IR推進部会（主査：教務部長）、外部資金獲得・活用部会（主査：事務部長）を設置した。自己点検・評価委員会は学長をトップとして教職員で構成されており、三つの部会のメンバー構成も基本的には同じである。

教育改革推進部会が教育改革の推進を担当し、PDCAサイクルを回している。教務関連事項は教務委員会にその都度周知している。

また、小規模短期大学でIRのための専門職員を配置することは資源的に不可能である点、IRは職員ではなく教育の現場を知っている教員が実施することに意義があると考えた点から、教員が各種アンケート結果に基づいてIRを実施し、IR推進部会に諮っている。

学識経験者や各学科の関係団体の代表者からなる外部評価委員会(11名)を2015年に設置した。委員からの評価を、教育研究活動の質的向上や管理運営等の改善につなげている。

取組後の変化

以前は、各種アンケートの集計が手作業であるため時間と労力がかかったが、Webシラバス・システムを利用することで効率化につながった。

また、私立大学等改革総合支援事業を基盤とする取り組みにより、PDCAサイクルをルーティン化するための体制の構築はほぼ終了した。現在は学修成果の可視化データに基づいて、各種改善のためのIR活動に着手している。

学修行動・生活調査において、2017年度の卒業生が自己評価した結果を分析したところ、五つの基準の学修成果で成長が見られた。加えて、授業外学修時間や授業満足度も向上

しており、授業に出席している学生たちの顔つきが変わってきたと感じている。

2015年と2017年に就職先アンケートを実施したところ、企業側は知識や技能よりも人間性や協調性を学生に求めており、当短期大学との考え方に微妙な差があることが分かった。その結果も踏まえ学修成果の五つの基準や各種アンケートの改善につなげている。

成功のポイントや苦勞した点

学長のリーダーシップのもと補助金を活用して積極的に改革を進めてきた。行政まで出向くなど、改革を推進するための強力なバックアップを学長自身が行ってきた。先頭に立って改革を引っ張っていくという学長の姿勢は、教職員に改革への納得感を与えている。

改革内容のすべてを教職員が理解することは難しい。そこで2016年から定例のFD研修会以外に、全教職員を対象に毎月の教授会のあとの約30分をミニFDとして実施し、情報共有等を図っている。

改革は一気に行うと抵抗が起きるため、徐々に改革を進めながら、教職員に改革のメリットを感じてもらうことが大切である。

今後の課題・展望

五つの基準による学修成果の評価方法の精緻化を考えている。特に学修成果の思考力・判断力・表現力（LO3）、関心・意欲・態度（LO4）、人間性・社会性（LO5）についてどのように評価するのか手段の開発を含め検討していきたい。

また、各種アンケートが3年分集計できたため、今後はその蓄積されたデータをもとにIRを実施し、PDCAサイクルを回しながらさまざまな教育改善を進めていきたいと考えている。